

(随想)『シェイクスピアと時間』 (Essay) 'Shakespeare and Time'

川地 美子
KAWACHI Yoshiko

1976年の冬から春にかけて、私はワシントンD.C.にいた。フォルジャー・シェイクスピア・ライブラリーで研究するためである。この図書館は、ヘンリー・クレイ・フォルジャー夫妻が集めた書物をもとに1932年に設立され、シェイクスピアの最初の全集である第一・二つ折り本をはじめとして、四つ折り本、ルネサンス関連の専門書や稀覯本、それに銅版画などを多数所蔵している。そしてアメリカだけでなく、世界中の研究者が閲覧の機会を与えられており、物音ひとつしない部屋で研究にいそしむ高名な学者らの姿が、今なお私の脳裏から離れない。

閲覧室の壁面に、『お気に召すまま』に登場するジェイクイズの台詞が書かれていたのを思い出す。彼は「この世はすべて舞台、男も女も皆役者だ」と言い、人生を7つの時期に分けている。最初は赤児、次はいいやや通学する少年、第3期は溜息をつく恋人、第4期は名誉を求めて争う兵士、第5期は腹の出た裁判官、第6期は痩せ衰えて鼻眼鏡をかけた老人、最後は「歯なく、眼なく、味覚なく、まったく何もない」と語っているが、ウィリアム・ハズリットは、この言葉にシェイクスピアの声を感じ取ったという。

このようにシェイクスピアは、人間の誕生を舞台への登場、死を舞台からの退場というメタファーを使って、人生＝舞台という構図を示した。これは、「人生は歩きまわる影法師、/あわれな役者だ、舞台の上でおおげさにみえをきっても/出場が終われば消えてしまう」（小田島雄志訳）というマクベスの有名な独白にも通じる考え方で、いかにも演劇人のシェイクスピアらしい言い回しである。

彼の『ソネット集』の116番には、「時は愛の道化ではない」という一行がある。マーヴィン・スピヴァック教授の『ハーヴァード・シェイクスピア・コンコーダンス』によれば、‘time’とその関連語の頻度数は約1450回、‘love’のそれは約2360回で、両者ともかなり高い数値である。私はニューヨークで教授にお目にかかったことがあるが、当時まだ普及していなかったコンピューターを使って作品中の言葉を調べたという話を聞いた。学者の仕事は、まさに職人芸である。

確かに、シェイクスピアの作品には、時間への言及が多い。例えば、『トロイラスとクレシダ』におけるユリシーズの「時は大きな頭陀袋を背負った忘恩の化け物だ」という言葉は、よく知られているが、どのようにシェイクスピアが時間を意識し、作品や台詞の中に反映させたかを少し探してみたい。

『ヘンリー四世』第二部に、「人は時に任える家来だ」という言葉がある。人間が時間に支配

される存在であることは否めない。余談になるが、なぜか私も常に時間に追われている。現役時代には講義や会議の開始時間を気かけ、退職後も原稿の締め切りや内外の学会発表や講演など、結構忙しいのだ。以前、時間的束縛から解放されるには旅に出るしかないと考えてタヒチまで飛んだことがあるが、到着した宿の部屋には時計がなかった。不安になり、フロントに電話をかけると、「ここでは時計はいらないのです」という返事だった。美しい大海原に突き出たコテージでは時間を意識しないのが心身の休養に役立つと察し、私は宿の配慮に感謝して、時間から解放された気分で、幸せな数日間を過ごすことができた。

ロマンティック喜劇の『お気に召すまま』では、森が主な舞台である。諷刺家のジェイクイズが森でタッチストーンという道化に出会うと、道化は日時計を取りだして、「今は10時、1時間前は9時、1時間後は11時」と言い、更に「このように時々刻々われわれは熟し、時々刻々われわれは腐っていくが、そこに問題がある」と言う。これを聞いたジェイクイズは、1時間も笑い続け、道化を尊敬するとまで言い放つのだ。だが恋人のロザリンドを追って森に来た貴族の青年オーランドーは、「森に時間はない」と言っている。

ちなみに、宮廷人にとって、森は時間から解放され、田園生活を楽しみながら休息する場所である。例えば、弱気で臆病なヘンリー六世は、諸侯が争い、権謀術数の渦巻く宮廷よりも、のどかな羊飼いの生活に憧れている。王は、「何時間、羊の世話に、何時間、自分の休息に、何時間、考えごとに、何時間、遊びごとにかければいいか」と、羊飼いの生活について語った後、分、時、日、週、月、年と、時がその使命を終えるまで過ぎれば死を迎えることになる羊飼いの人生を、美しく素晴らしいと思うのだが、この考えは、ストレス社会を生きる現代人の共感を呼ぶかもしれない。

ところで、男装したロザリンドは、オーランドーが約束の時間に遅れたのを責めて、「時は、それぞれの人により歩みの速度が違う」と言う。彼女は時間が個人によって速く進んだり遅く進んだり、或いは全く動かない場合もあることを示唆しているのだ。また時計が刻む客観的時間と主観的時間ないし個人的時間の違いに言及して、愛は後者に属すものだと言おうとしている。これは、バルコニーの場で愛を誓った後、ロミオからの吉報を待ちわびるジュリエットの場合にも通じるように思う。彼女は恋の使いを務める乳母の帰りが遅いのを非難して、「もしばあやに愛があり、熱く若い血があったら」と語り、心がはやるのを訴えるが、愛が主観的時間ないし個人的時間に属することが、ここにも示されているからだ。

時間にはまた、破壊作用と創造作用が見られる。シェイクスピアは後期の作品、即ちロマンス劇と呼ばれる悲喜劇の世界に、こうした時間の作用を反映させている。『冬物語』を例に引いて考えてみよう。主筋は、シチリア王レオンティーズが王妃ハーマイオニとボヘミア王ポリクシニーズの関係を疑い、激しい嫉妬に駆られ、夫婦が16年後にようやく和解する話だが、前半は暗い出来事の連続である。王妃が王の命令により幽閉され、それを嘆いた王子が夭折し、生まれたばかりの王女がボヘミアの海岸に捨てられるからだ。

この冬の情景が春の風景に変わるのを観客に知らせるのは、第三幕と第四幕の間に登場する

コーラスである。コーラスとは、エリザベス朝演劇で筋の進行を話す語り手のことで、『冬物語』では擬人化された「時」がこの役を務める。コーラスとしての「時」は、「ある人々に楽しみを与え、すべての人々に試練を課し、/善人の喜びともなれば、悪人の恐怖ともなる私、/間違いを起こしたり、解きほぐしたりする「時」と名乗って/翼を使わせていただきます」（小田島雄志訳）と言い、また16年が経過したことを知らせるのだが、この台詞には、すべてを食い尽くす破壊力を持つ時間と、問題を解決し、期待される未来を予告する創造力を持つ時間への言及が見られる。

王女のパーディタ（「捨てられし子」の意）は、幸運にも羊飼いに拾われて美しい娘に育ち、羊毛刈り祭で変装したボヘミア王子フロリゼルと出会い、恋に落ちる。王妃ハーマイオニは獄死したことになっているが、忠実な侍女ポーライナの保護により実在している。彼女は王妃の貞節を信じる唯一の人物で、レオンティーズの病的な嫉妬が疑念に過ぎず、錯覚であることを彼自身に気付かせる役割を果たしている。また彼女は、ハーマイオニの彫像を作らせてレオンティーズに見せ、それが動き出すという仕掛けを使って、王と王妃の和解を実現させる。このように、悲劇的な筋を喜劇的な筋に転換させるのがポーライナという脇役の女性人物である点に、シェイクスピアの優れた技法が見出されるように思う。最後に、一族再会、和解、復活、再生の喜劇的テーマが明示され、パーディタとフロリゼルとの結婚がもたらすシチリアとボヘミアとの平和や、王の忠臣カミロとポーライナの結婚が知らされる。

概して喜劇は恋人たちの結婚で終わるが、悲劇は主人公の死で終わる。つまり、前者には周期的ないしは円環的時間が、後者には直線的时间が流れているのだ。例えば、『マクベス』について考えよう。主人公のマクベスは、バンクォーとともに戦場からの帰途、「マクベスはコーダーの領主になり、その後スコットランド王になるだろう。バンクォーは王にはならないが、子孫が王位につくだろう」という魔女の予言を聞く。魔女はまた、「綺麗は汚い、汚いは綺麗」という不可解なことを言うが、この言葉は、これから主人公が直面する無秩序で暗いカオスの世界をも表象している。魔女の予言で野心を募らせたマクベスは、ダンカン王、バンクォー、マクダッフ夫人と子供らを殺害し、最後に、女の腹から生まれなかったマクダッフによって殺されるという憂き目をみるのだ。

野心は、未来志向の欲望と言える。マクベスは野心に駆られるが、その一方で、恐怖と不安を抱くようになる。しかも彼が「わが偉大なるパートナー」と呼ぶマクベス夫人は、彼の「人情という乳が多すぎる」性格を案じて、王位篡奪を渋る夫を臆病呼ばわりするだけでなく、自らも魔女のような存在に変身する。今風に言えば、この夫婦の間柄は、男性的な女丈夫と目標達成に躊躇する弱気で女性化した男性との関係とみなしてもよいだろう。

妻が夢遊病になり、死の知らせを聞いたマクベスは、独白でこう語る―「あれもいつかは死なねばならなかった/、/明日、また明日、また明日と、時は/小きぎみな足どりで一日一日を歩み、/ついには歴史の最後の一瞬にたどりつく、/昨日という日はすべて愚かな人間が塵と化す/死への道を照らしてきた。消えろ、消えろ、/つかのまの燈火! 人生は歩きまわる影法師、/

あわれな役者だ/、、、/白痴のしゃべる物語だ/、、、/何の意味もありはしない」(小田島雄志訳)。

この独白は、未来への言及から始まり、いきなり過去へと移っている。マクベスは未来志向の野心を抱いて明日を夢見た結果、王位篡奪や多くの殺害という罪を犯した過去を自認する。そして最後に現在に言及するのだが、その現在とは、人生は無意味なものだという認識に辿り着く時間である。このようにマクベスの人生は、悲惨な死の瞬間まで、直線的に流れる時間として示されている。

時間については、古代から現代まで多くの哲学者が論じてきた。プラトンやアリストテレスやアウグスティヌスらから影響を受けた中世及びルネサンスの人々は、著作の中で時間への関心を示している。度重なるペストの流行で死を身近に感じた彼らは *memento mori* (やがて死すべき運命にあることを記憶せよ) の意識を強め、また時間を足の速い無情な破壊者とみなして *carpe diem* (現在を楽しめ) の思いを共有したに違いない。アーウィン・パノフスキーは著書『アイコノロジーの研究』で、「シェイクスピアだけが「時」に助けを請い、挑み、また「時」を叱責し、そして征服した」と述べたが、この見解は注目に値する。

ところで、『夏の夜の夢』に登場する妖精パックは、「地球を一回りするのに40分もかからない」と豪語している。シェイクスピアの足どりは、これほど速くはないものの、作品が地球を回った結果、今日では彼はグローバルな存在になっている。そして『ソネット集』60番で、「「時」の大鎌に刈り取りとられないものはない。/だが、ぼくの詩は、遠い未来にまで生きながらえ、/残酷な破壊の手に抗して、きみの真価を讃え続ける」(岩崎宗治訳)と記しているが、文中の「きみ」は、シェイクスピアが詩集を献呈した青年貴族であり、「ぼく」は、詩集を世に出した詩人であろう。天才シェイクスピアも人間であり、時間の子である。彼は自分の作品が「時」(Father Time)の大鎌に刈り取られることなく、永遠に生き残ることを願ったのではないかと推測するが、誤りだろうか。

2023年は、第一・二つ折り本の出版400年後にあたる記念すべき年だった。生地ストラットフォード・アポン・エイヴォンは勿論のこと、ロンドンのギルドホールや大学の図書館などで初版本が展示され、多くの人々に見る機会が与えられた。ライバルで友人でもあったベン・ジョンソンは、この貴重な書物の出版に際して讃辞を贈り、「シェイクスピアは一時代でなく、万代の作家だ」と記して彼の永遠性を予告したが、同じような内容の言葉を、後進の日本人である坪内逍遙も残している。「シェイクスピアよ、安心したまえ、君の作は、やっぱり、萬代不易である」と、『シェイクスピア・アット・ランダム』に書いているのだ。私は、シェイクスピアが文化的触媒として東西の交流に寄与し、作品を通して今なお存在していることを認識すべきだと思う。そして、言葉は話すが心を持たないAIに戸惑いながら依存する現代にこそ、時間の波に洗われて生き残った先人の作品や言葉に触れる体験が、人知を高め、人間性を保つために不可欠と考えるが、この想いを多くの人々と共有できるのを願っている。